

平成26年度サクラマス幼魚（スマルト）放流式

6月2日（月）、老部川内水面漁業協同組合（坂本石蔵組合長）のサクラマスふ化場で、村内各漁協をはじめ県・村関係者等60名出席のもと、サクラマス幼魚（スマルト）放流式が行われました。

この放流事業は、主に沿岸海域でのサクラマスの水揚げ増大を図ろうと、昭和60年のサクラマスふ化場完成とともに毎年実施しているものです。

今回のサクラマス幼魚（スマルト）放流式では、平成24年8月中旬から10月上旬にかけて老部川に遡上した親魚と池産系の3年間飼育した親魚から採卵し、ふ化してからおよそ1年6ヶ月間飼育した、平均尾叉長13.9センチ、平均体重29.6グラム程度の幼魚17,701尾が関係者の手により放流されました。

なお、今年は全体で幼魚62,917尾、稚魚210,625尾の計273,542尾を、村内の河川に放流する予定となっています。

今後も継続的にサクラマス幼魚や稚魚放流を実施することで、沿岸海域での水揚げと河川回帰の増大に、大いに期待がもてるものと思われます。



関係者による放流



放流されたサクラマス幼魚（当日の水中写真）

東通村漁業連合研究会「スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」を開催

5月27日（火）、村体育館において、村漁業連合研究会（川端昭也会長）主催による「平成26年度スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」が行われました。

約40名が参加した今回の研修会では、講師の地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所 漁場環境部 研究管理員 清藤真樹氏から近年の漁獲動向や水温分布に基づく漁況の見通しについて講演がなされました。

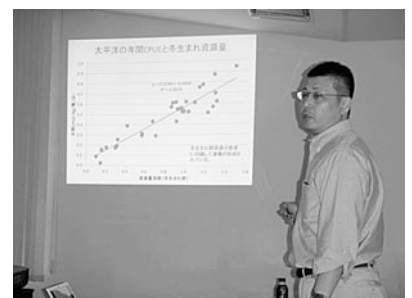
清藤研究管理員によると、本県周辺における漁況の見通しは、次の通り予測されるということです。

「本県周辺海域では、冬生まれ群の資源量に強く影響を受ける。今期の冬生まれ群の資源量は昨年並みとなっており、太平洋・津軽海峡でのスルメイカ漁は昨年並みの漁獲となる見通しではあるが、“近年の津軽海峡への加入量の減少”といった不確定要素もあるので、今後の情報に注意してください。」とのことでした。

参加者は「昨年並み」という予測に安堵の表情を見せながらも、真剣に耳を傾けていました。



研修会の様子



講師 清藤真樹研究管理員